声・図書委員長に聞く

職種別に、1)医師、2)薬剤師、放射線技師、臨床検査技師などのコメディカル、3)看護婦、4)その他の職種に分け集計した。まず1カ月の図書室利用回数は、医師では月4回以上が約50%、コメディカル・看護婦では1～3回が70～80%であったが、その他の職種では約3/4の人が全く利用していなかった。利用したことがない理由として、時間がない、読みたい本がないなどであった。利用目的は、医師・コメディカルは、文献検索・資料収集が60～70%であり、看護婦・その他の職種ではコピー、学習、会合が60～80%で多かった。利用時間帯は、ほとんどが昼休み以降と勤務時間外であった。図書室に文献・資料がない時の入手方法は、医師・コメディカルでは約70%が知人などに依頼して入手しているのに対し、看護婦では約50%、その他の職種では約70%の人があきらめていた。文献相互貸借の利用は、全体の5～10%で月に約20件であった。当図書室では、文献検索 CD-ROM 機が設置されているが、今までに利用したことがない人は、医師38%、コメディカル80%、看護婦94%であった。

以上の結果より、職種により図書室の利用状況が異なること、迅速で確実な文献検索・資料収集の希望が多いことがわかった。今後当病院図書室としては、CD-ROM 検索の定期的な講習、指導を行うとともに、文献相互貸借の利用の普及など、少なくとも必要な文献・資料があきらめずに入手できる確実な体制を整えたい。

さて病院は多くの職種のスタッフと患者とで成り立っている。今まで病院図書室は、医師など一部のスタッフに対する医学専門的な支援が中心になっていたと思われる。今後の役割として、全スタッフを対象とした幅広い情報の提供が望まれる。また患者サービスとして、一般書を含めた閲覧の機会の提供なども必要と考えられる。

ネットワークのたまもの

田中外科病院院長
田中　一雄

戦後10年くらいの間は、必要文献の入手は、甚だ困難なことの一つでありました。大学を離れて開業した途端、日夜診療に追われて、寧日なき毎日を過ごさなければなりません。ましてや大学に行くこともままならない状態となりました。診療について言うまでもなく、自分の専門分野がどの様な方向に発展していくのかも、大きな関心事でありましたので、自分の専門分野を中心に、国内外の雑誌を備えておくことにいたしました。現在国内43誌、国外10誌を定期購入しております。

私の病院は私の出身校との関係もあって、九大、福大、鹿児島大学の関連病院として、若手を派遣いただいておりますが、よく利用していただいております。また、院内で間に合わない分は、近畿病院図書室協議会のネットワークで、早速入手でき助かっております。

現在図書室の担当者は、図書司書補でございますが、診療録管理士の資格も取得しておりまして、医学に関してもかなりの興味と知識をもっております。最近では、入手したい項目を申しますと、関連の文献を数点揃えて参ります。近畿病院図書室協議会のネットワークのたまものと思っておりますが、今後ますますこの方面に力を入れていただきたいと思います。

次にふえる一方の図書の管理でございますが、製本やスペースの確保に頭を悩ましております。何かいい方法はないでしょうか。

以上考えつくままに述べさせていただきました。今後ともよろしく御指導下さい。